宮崎駿

イメージボード集

HAYAO MIYAZAKI IMAGE BOARD

講談社

宮崎 駿

イメージボード集

HAYAO MIYAZAKI IMAGE BOARD

講談社

もののけ姫

①戦いにやぶれ
道に迷った武士
灯をみつけて

②大きな樹の洞
人気はなく、
食い物がたくさん

③無断で
ガツガツ食ううちに、

④主がもどってきた

⑤山に巣くう大山猫

⑥さっそく
出刃包丁をとぎはじめる
たすけてくれ
三人の娘のうち一人を
嫁にやるとの約束

⑦ヨーシ、
約束を忘れるな

⑧クソッ
重いやつだ……！

⑨一方、武士の館では、

⑩殿の行方が判りません
逃げ帰った部下に
奥方はカンカン

⑪満月の夜に
むかえに来るぞ
ワーッ

⑫大屋根の鬼瓦にひっかかる
ものいわぬはずの鬼瓦にまで
なんとも情けない男だ、と
ののしられる武士
かくかくしかじか
武士は語る

⑬戦いに破れ、おまけに
もののけに娘をやれとは
なんという腑甲斐なさ
おりしも敵軍が国境にせまり、
奥方は一の姫、二の姫を
連れて、さっさと里帰り
残ったのは、心やさしい三の姫のみ

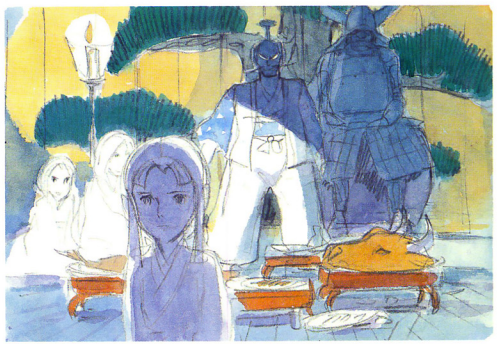
⑭追いつめられた武士の前に
天井をつき破って現れた
大屋根の鬼瓦
身体をかせば
強い男にしてやろう
三の姫が止めるのもきかず
武士は鬼瓦に宿った悪霊の話にのる

⑮武士は生まれかわった
ガツガツと飯をかきこみ
先祖伝来の
重過ぎて着られなかった
甲冑も軽々と着込む

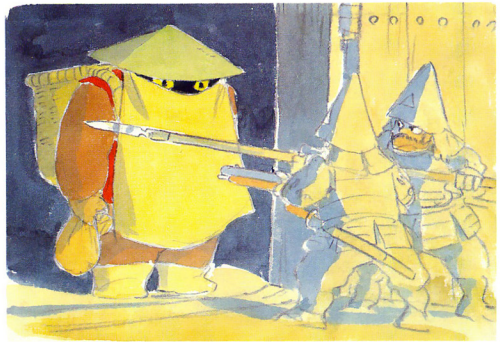
⑯押し寄せた敵軍を
たった一人で迎え打ち

⑰死人の山を築く
武士は世にも恐ろしい武士に
変身した

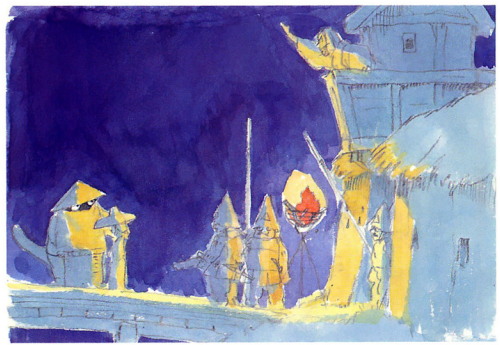
⑱今は、心やさしい
三の姫がうとましい
武将（悪霊）は
秘密を知っている
三の姫を遠ざける
お前なぞ
もののけの娘がちょうどいい



⑲そこへ、約束どおり
もののけが嫁とりに来た



⑳お前は今夜から
もののけの嫁となれ



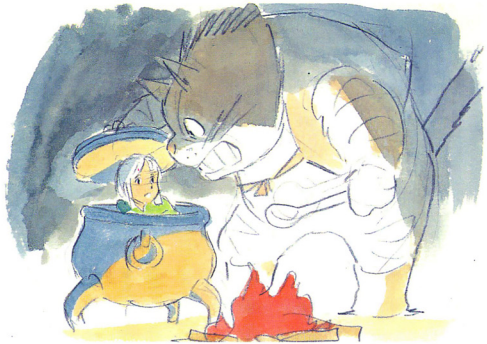
㉑もののけに背負われて
三の姿は人里はなれた土地へ
連れ去られる

㉒さあ婚礼じゃ
飲め、食え、と
浮かれるのはもののけばかり
三の姿はかたくなに、
父を人間にもどすまでは
嫁になるわけにはいきません

㉓いっこうになびかぬ三の姿に
もののけは逆上！

㉔言うことをきかぬ姿など
食っちまう

㉕おどせど
すかせど
降参しない
エエイ
どうしろと言うんじゃ



㉖どうか力をかして下さい
悪霊を退散させることが出来たら
かならず
あなたの嫁になりますから……
しようもない
その約束忘れるな

㉗悪霊退散の方法を探す
つらい旅がはじまる
山また山のその奥に
もの知りの亀が住むという

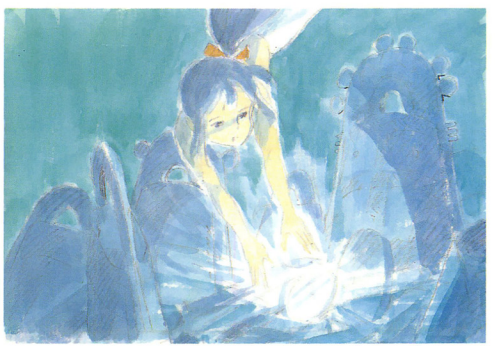
㉘弱音をはくかと
おもいきや

㉙三の姫はけなげに耐える

㉚なんとめんどうなと
苛立ちながらも
おのずと情も移って来る

㉛〜㉝深山幽谷へ
国が生まれた時からの
森を抜け
大亀と出会う

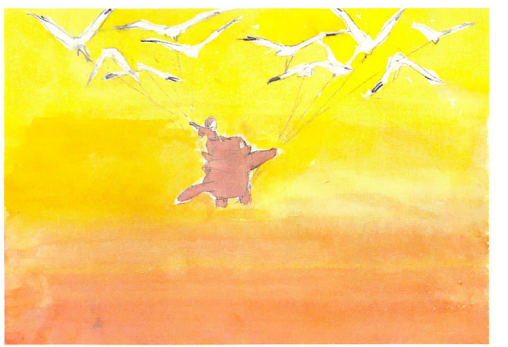
㉞求める心があるからこそ
悪霊は人にとりつくのだ
少しの間悪霊の力を
押さえる力を与えよう
望みがあるとするならば
お前の父に人の心が
わずかでも残っていることだ……



㉟湖の底に
太古からの宝物が沈んでいる
青銅の鏡
長い年月にもかかわらず
光を失っていない

㊱あとは
お前の心の強さが
すべてを決めるだろう……

㊲大亀の心くばりの鶴にのって
故里へ



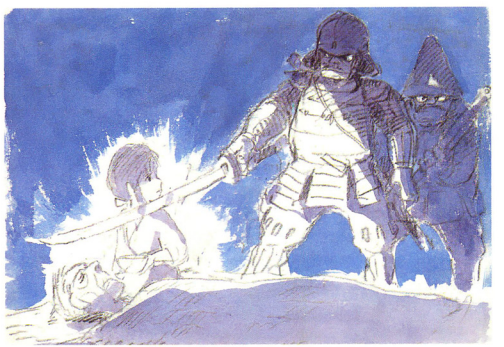
㊳悪霊は遠視の術で
不吉な光が近づくのを知る

㊴故里を出てから既に一年がたっていた
三の姫は故里の有り様に茫然となる
小さな山国の館は
巨大な城に変わっていた
いまや悪霊の力は
おぞましく強大なものに
なっていたのだ

㊵武具の音が鳴り響き

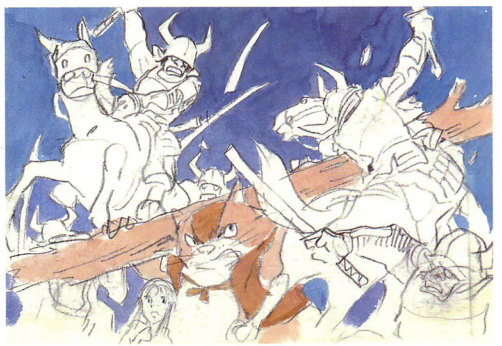
㊶鉄を打つ炎が大地をこがし

㊷圧政に苦しむ人々の怨嗟の声が地に満ちている



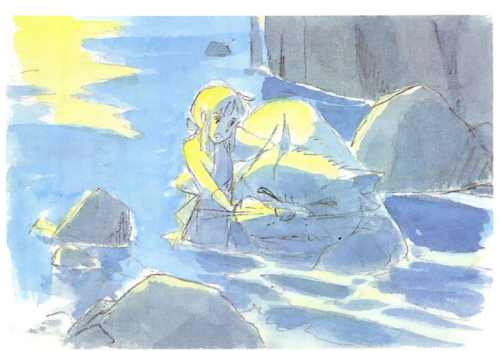
㊸討つ手がくり出され

㊹もののけは姫を守って大奮戦



㊺俺の嫁に手を出すな！

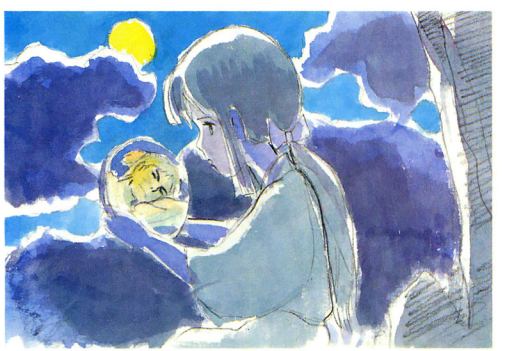
㊻火を吹く討つ手どもの銃！



㊼傷つきながらももののけは姫を守った

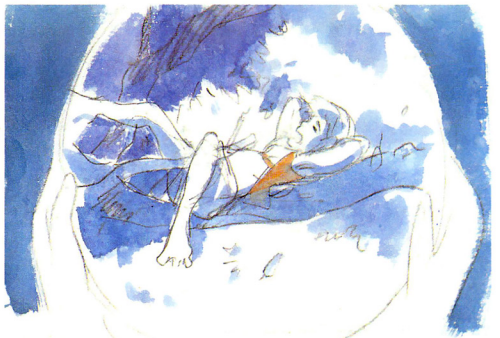
㊽今は、二人の心に
かよいあうものがある
無理に嫁になれとは言わぬ
一緒に山に帰らんか……
今は、生命を投げ出すしかないと
心を決めて
三の姫はそっと鏡を取り出す

㊾月の光の中で
眠っているもののけの姿が鏡に映る
それは
もののけの本当の姿だった



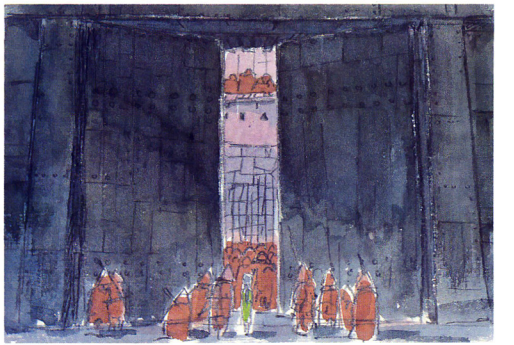
㊿鏡はもののけの心を映す
けもののようにあばれ

51けもののように
暮らすうちに



52ある日
けものの姿になってしまった
もののけの悲しみを……
三の姫は、いつの間にか
もののけを愛している
自分の心を知る

53でも
あなたとの約束をはたすことが
出来ません
私は父のもとへまいります
どうか許して下さい



㊹三の姫は一人
父の城へおもむく

㊺もののけの元に嫁いだ娘が
里帰りしたのです
道をあけなさい
三の姫の気品ある態度に
旗本達も道をあける

㊻目覚めたもののけは
姫がいないのに気づく

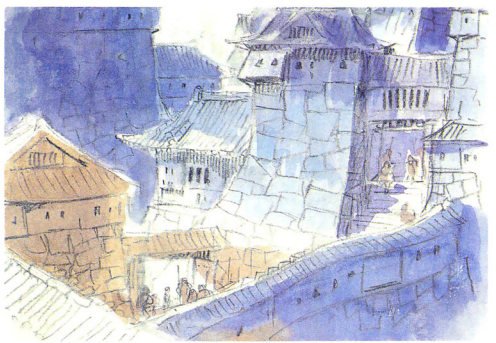
㊼三の姫を見なかったか！
お城へ行きました
お一人で
ナニッ！

㊽もののけは走る
姿をかくすことも忘れて

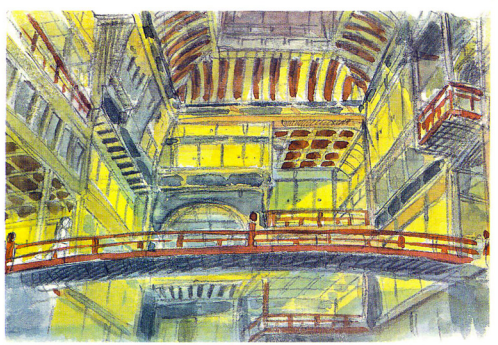
㊾おどろく兵たち
飛び込んでいくもののけ

⑥0城では

⑥1姫はずんずん進んでいく



⑥2天守の巨大な広間
父のいる所へ



⑥3父娘は出会った

⑥4もはや心ばかりか
身体まで、悪霊に食いつくされた
父の姿
もののけに嫁いだ娘が
父親に逆らうとは
思い上がりのおろか者め

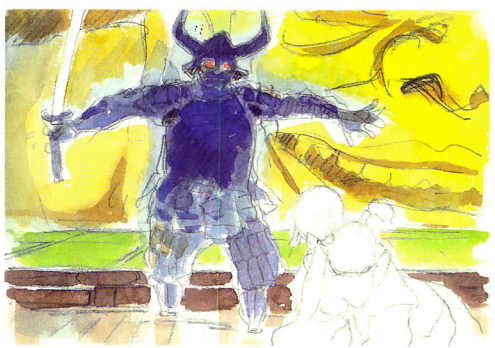
⑥5殺気とおぞましい霊気を
一身に浴びながら
三の姫は立ち向かう

⑥⑥刀をふりかざす悪霊
姫は
かくし持っていた鏡をかざす
たじろぐ悪霊

⑥⑦三の姫は
父のふところに身を投げる
鏡はこなごなに砕け
たまらず悪霊は
武士の身体から逃(のが)れ出る

⑥⑧武士は、愛する娘を見いだし
だきあう父娘

⑥⑨逃(のが)れ出た悪霊は
かたわらの甲冑に乗り移る



⑦⓪血をすすって成長していた悪霊は
実体になりつつあった

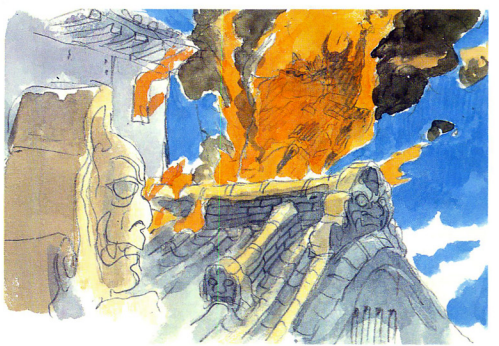
⑦①鉄面の口からほとばしる
地獄の劫火(ごうか)

⑫その時
もののけが飛び込んで来た

⑬炎を一身に受け止め
火だるまになりつつ
悪霊に襲いかかる

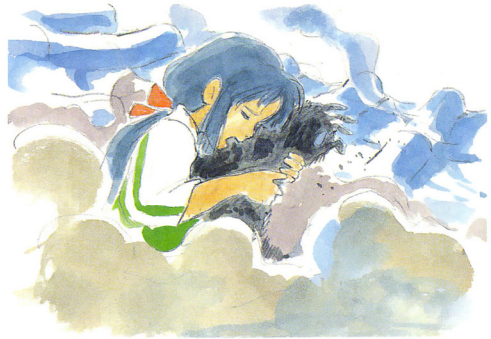
⑭かなわじと逃(のが)れる悪霊に
追いすがるもののけ

⑮かけよる姫

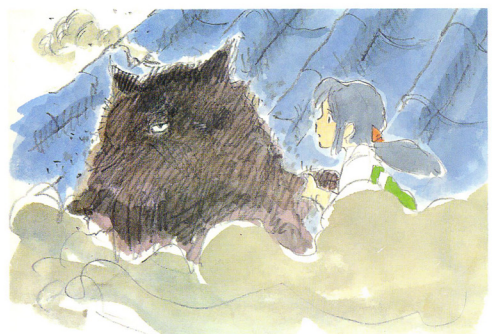


⑯二人を炎がつつむ

⑰ギャ――ッ
悪霊は燃えつきる
もののけも力つきて崩れ落ちる

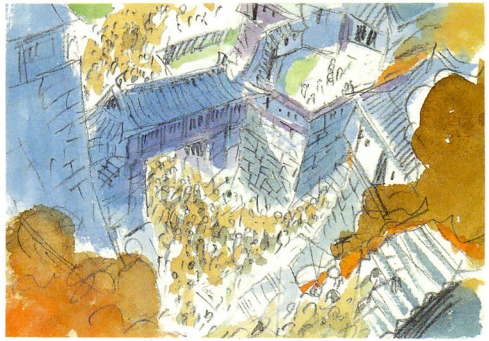


㉘もののけにとりすがって
泣く三の姫
と、その腕が動く
生きている！



㉙わしは山いちばんの
もののけだ
かわいい嫁をのこして
死んでたまるか

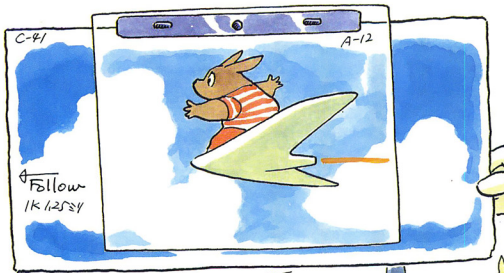
㉚ワッハハハ



㉛圧政に苦しんでいた人々が立ち上がる
城門は打ち砕かれ
火の手が広がる

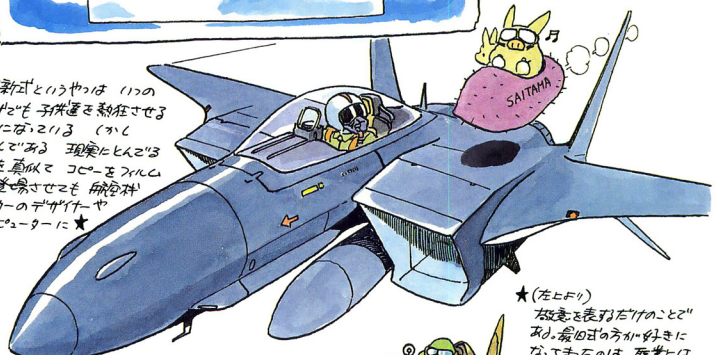
㉜武士は
娘に看取られながら
人間として息をひきとる
悪霊の築いた城は燃え落ちる
草木は甦り
人々は畑にもどる

㉝もののけは娘を肩に乗せて
山に帰っていく……



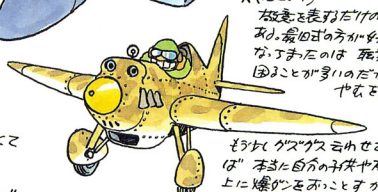
考えてみれば
地球上では絶対にとべない
ものでも アニメーションで
なら 背景に描いた空さえ
ひっぱりや 簡単にとべるのである

イモだって
コロッケだって
バンブリだって
空をとべるのだ



最新式というやつは いつの
時代でも 子供達を熱狂させる
ようになっている くやし
くやしである 現実にとんでる
ものを真似て コピーをフィルム
に登場させても 航空機
メーカーのデザイナーや
コンピューターに★

★(左上より)
敬意を表するだけのことで
ある。最四式の方が好きに
なってしまったのは 職業上は
困ることが多いのだが
やむを得ない

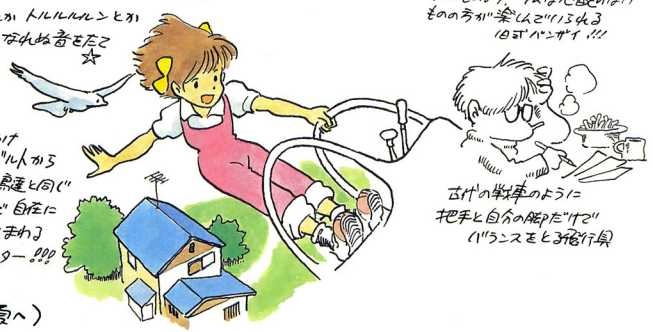


もう少しグズグズ言わせてもらえ
ば" 本当は自分の子供や友人の頭
上に爆弾をおっことすかもしれ
ないものより、そんな心配のない
ものの方が楽しんでいられる
四式バンザイ!!!

で… いつの頃からか

フィルムでオーニソプターをとばしたくて
チャンスをうかがうようになった

キィーン とか ギャーン とか 騒がず
プチプチとか トルルルルンとか
あまり聞きなれぬ音をたて ☆



☆
髪に風をうけ
シートとかベルトから
解放され、鳥達と同じ
位の速度で自在に
空中をとびまわる
オーニソプター!!!

古代の戦車のように
把手と自分の脚だけで
バランスをとる飛行具

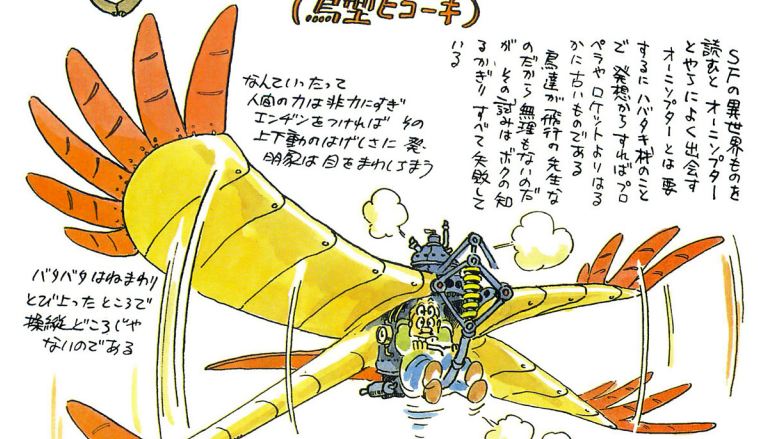
(次頁へ)

オーニソプターの伝説

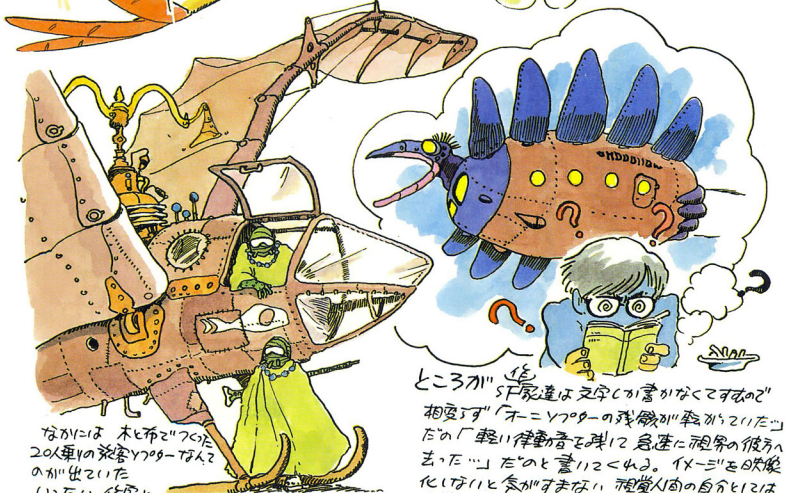
(鳥型ヒコーキ)

SFの異世界ものを読むと オーニソプターとやらによく出会う
オーニソプターとは 要するにハバタキ機のことで 発想からすればプロペラやロケットよりはるかに古いものである
鳥達が飛行の先生なのだから無理もないのだが その試みはボクの知るかぎり すべて失敗している

なんていったって
人間の力は非力にすぎ
エンジンをつければ その
上下動のはげしさに 機
胴体は目をまわしてしまう

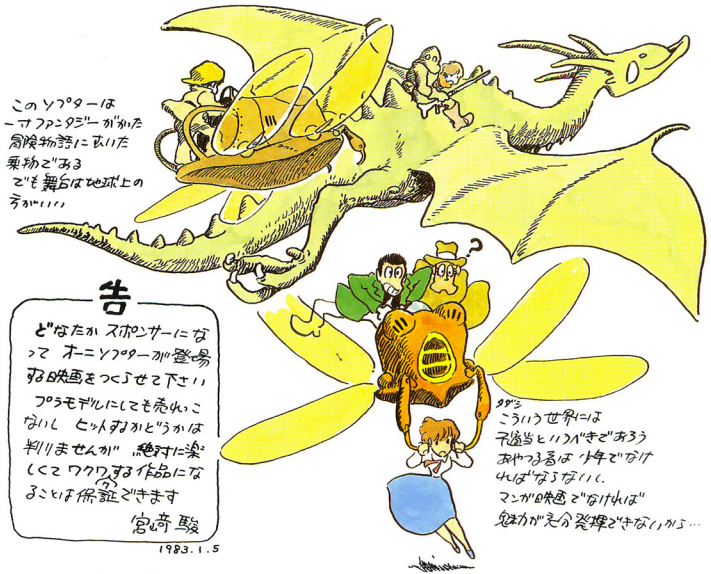


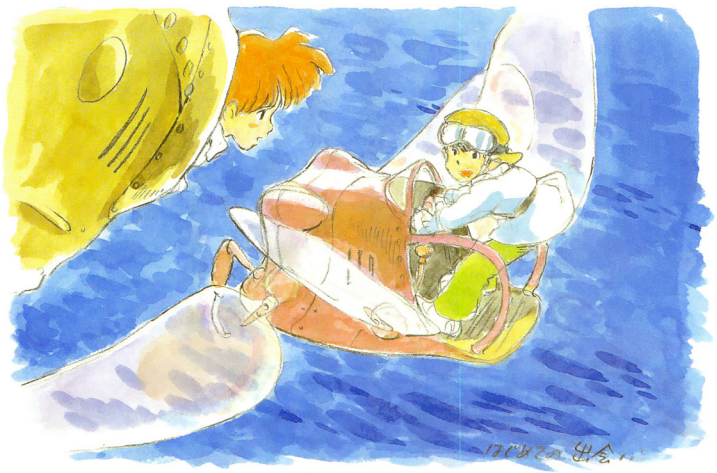
バタバタはねまわり
とび上ったところで
操縦どころじゃ
ないのである



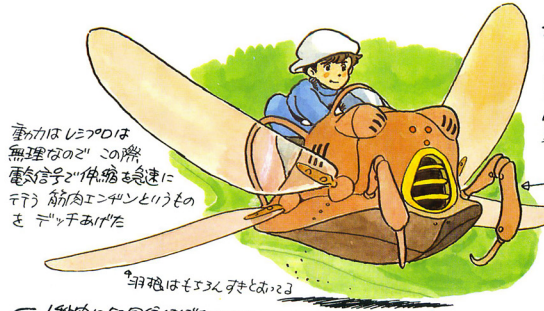
なかには 木と布でつくった
20人乗りの旅客ソプターなんて
のが出ていた
いったい 作家と
いう生物は何を考えているのだろうか

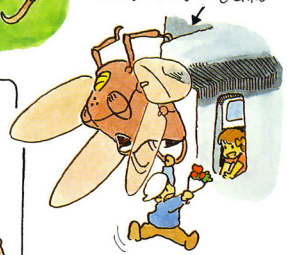
ところが 作家達は文字しか書かなくてすむので
相変らず「オーニソプターの残骸が発掘されていた」
だの「軽い律動音を残して 急速に視界の彼方へ
去った…」だのと書いてくれる。イメージを映像
化しないと気がすまない 視覚人間の自分としては
非常に困るのである!!!



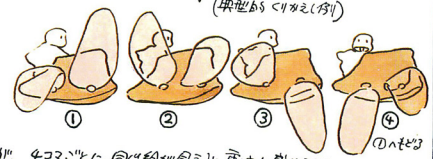


注）ことわりなく この乗物の使用はしないで下さい





1秒間に50回位はばたかせたいが 1秒24コマのフィルムでは1コマ作画にしても描きようがない
で、1秒6回（アゲハチョウ級）とするが、描きようで
これって充分 目くらましになる
1秒8回 1サイクル $\frac{1}{3}$ 秒は ↓ このような動きとなる（典型的くりかえし例）



が、4コマごとに同じ絵が見えると動きと感じるより
チラチラと絵の残像が 目にひっかかるようになるので
くりかえしのパターンを 三種類位つくって（つまり12枚となる）
乱れまぜた方が かんじが出るはずである 虫のはばたきよりは遅いが ← こんな風に処理には つまらない

羽根の透明感は
ブラシ処理もよし
撮影処理でもよし
でもはともかく
むずかしくはない

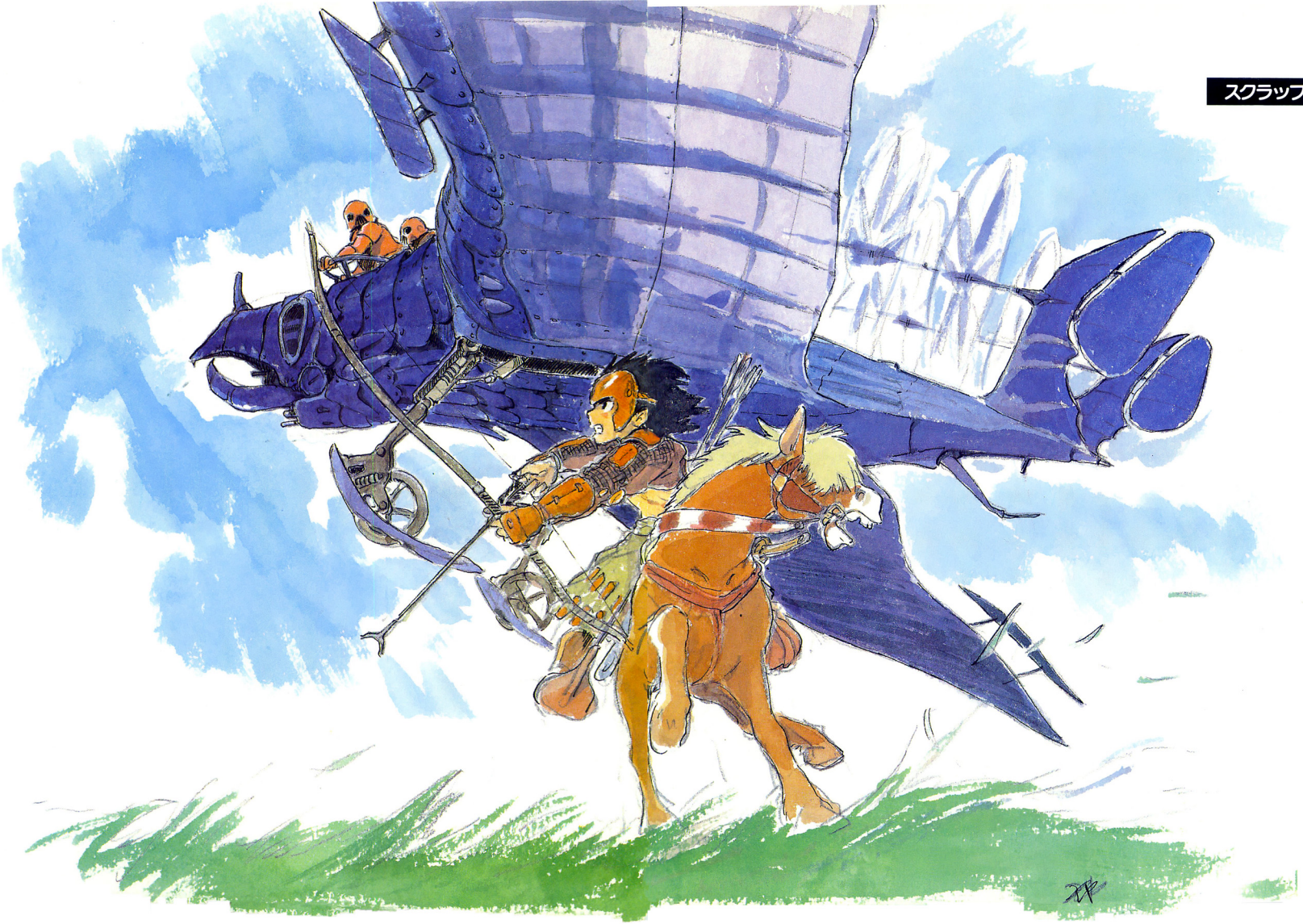
要するに アニメーションで大切なことは「うしさ…」であり、たくみなマヤカシの術なのだ

操縦席はこの位簡単にしまう
定員はつかみ
ユニバーサルスター
定員はつかみ
とする
三本のレバーで体重を支えつつ
操作もやってのけようのである
スイッチ
金人28号の例もあるから大丈夫
理屈とコーヤクはどこにでもつくのだ

◀波状飛行▶
背景をひっぱれば なんでもとんでしまうので、更に工夫をかさねる

★波状飛行は ある種の小魚によく見かけるもの
プリプリプリ
★効果音は 先の羽音に 律動的なコスレ音 さまざま 創出させたい

ピタッ
プリプリプリ
勿論 まっすぐにもとべるのだが、断続的に時々重力をとめて滑空させる
簡単な減速や 高度を下げたりするのにいいし 何より 効果音が個性的になる オッカケシーンには躍動感が出せていい



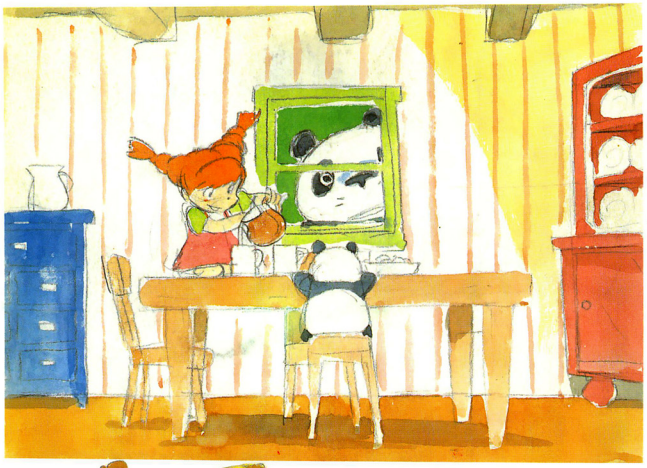
風の谷のナウシカ

土兵の一族

ミン（10ヲオ）
トトロ（679ヲオ）
おおトト（1300ヲオ）

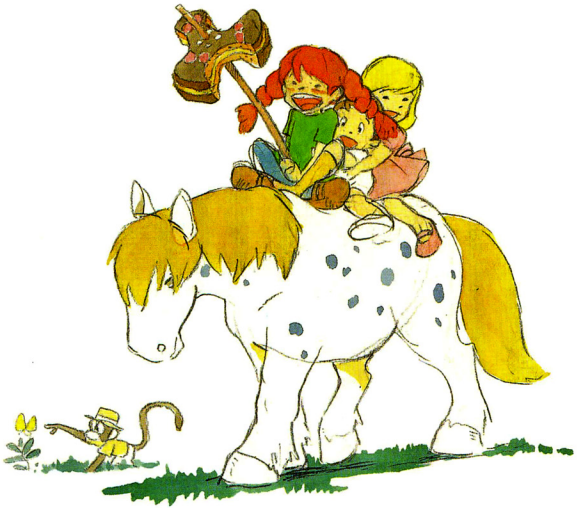
ススワタリ
メイ（ヨ月）

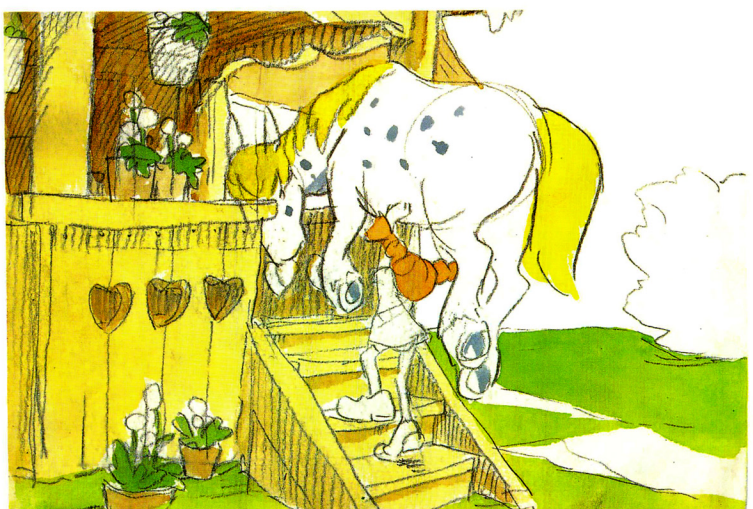
パンダコパンダ



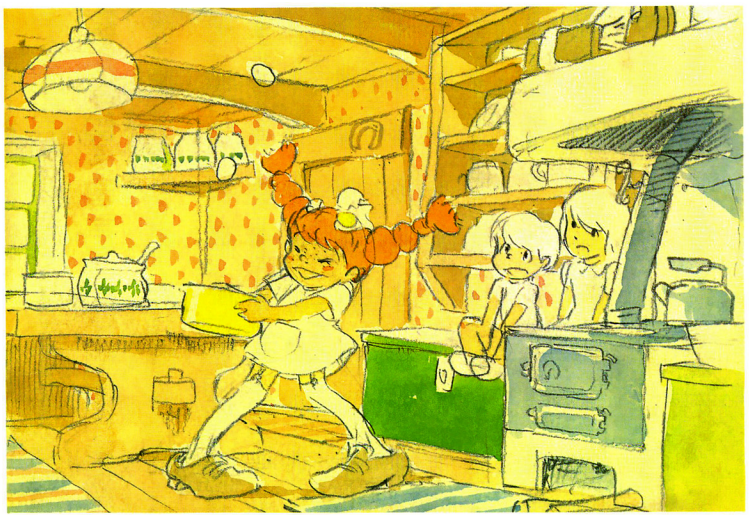
ジャンクし文字 1
又イかしき 1

世界一強い女の子

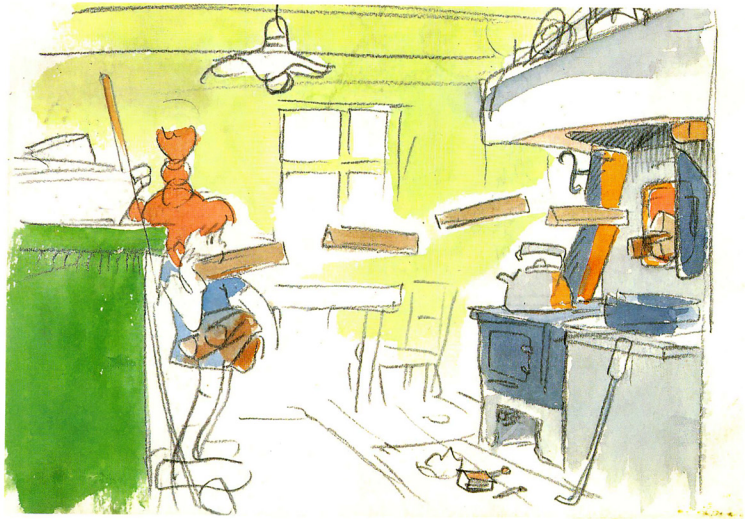




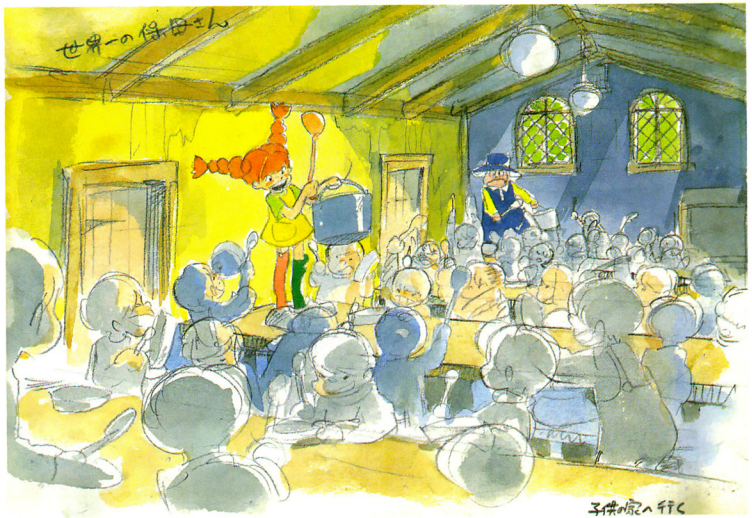
TOMATOR
100½Y



クツ下を
えらび

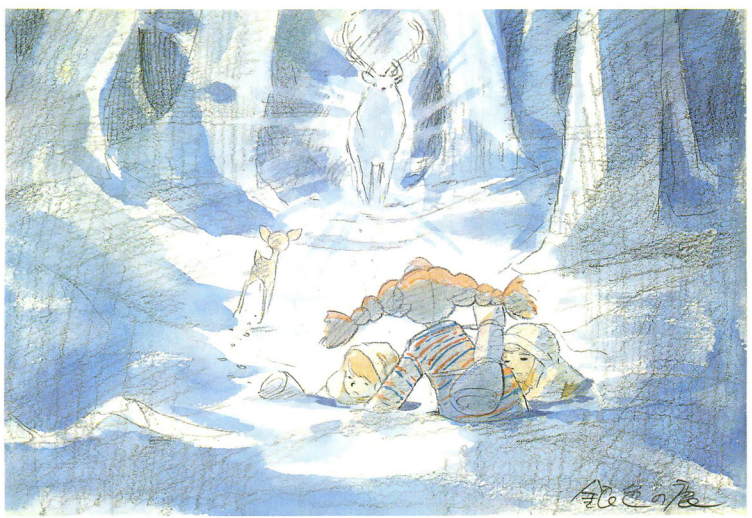


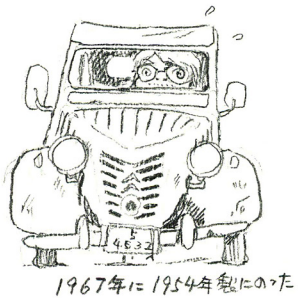
ジョース屋をひく


世界一の保母さん
子供の家へ行く

空飛ぶケーキ
郵便屋が、子守唄をしてから
大カリギ

空飛ぶケーキ


銀色の夜



あとがきにかえて
宮崎駿へのインタビュー

——今まで見て来た絵は、イメージボードっていうんですか？

宮崎　と、勝手に呼んでるんですけどね。でも、まったくの落書きも入ってます。イメージボードは作品の準備に描くもの、ストーリーボード—絵コンテと同じことなんですが—は、本番と思えばいいわけです。

——こういう形で描き始められたのはいつ頃からなんですか？

宮崎　ぼく自身は「ホルス」で、自然にはじめました。映画全体の雰囲気を決め、ストーリーの方向を決める材料にするものですから、なるべく多く描かなきゃならない。ザザッと鉛筆で描いて、単彩でごまかすなんてのも、方向をさぐる過程の作業だったから、一枚一枚手間をかけたくないわけです。昔は大きいものを描いたりしてたんですが、だんだん億劫になってきて小さくなっちゃった。近眼でしょう(笑)、ドンドン近づいていっちゃって……。

——できあがったものは、皆で見せ合うものですか？

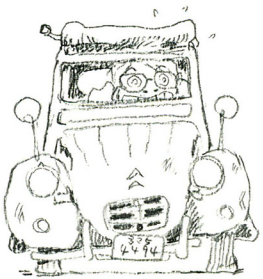
宮崎　ええ、もともとその為に描くものだから、ワーッと壁にはりめぐらして、なんとなく気分が出て来たとかなんとか……。準備に参加している人間も、してない人間も勝手にのぞいて、おもしろくなりそうとか、だめだこりゃとか……。とにかく材料を出す段階の絵ですからね。用が済めば要らないので、いつの間にかなくなった作品が多いですね。僕の所に残ってるやつは、なんとなく気持ちがひっかかってたり、持って帰るのにちょうど良いくらいまとめてあったりしたからなんです。

——漫画はどんなものを読まれましたか？

宮崎　いわゆるマンガ少年じゃなかったんですが、手塚治虫の単行本は読みごたえがありましたね。でもお金を出して買った記憶がなくて、「メトロポリス」といったかな、兄貴が借りて来たのをふとんの中でこっそり読んで、えらく感動したおぼえがあります。表紙もとれちゃってボロボロで、何ページなくなってるのか分からない、そのない部分がひどく気になったりして……。

手塚さんの初期の作品は、「アトム大使」にしても「ロック冒険記」なんかも、一種の悲劇性みたいなものがあって、子供の自分には非常に重かった。でも一番印象に残ってますね。やっぱり一番影響を受けたのは、手塚さんじゃなかったかと思います。

手塚治虫の作品には、なにか文明論のような視点と、世界にはお前が知らない事がいっぱいあるんだよ、という風な呼びかけが感じられましたね。「イガグリ君」とか「赤胴鈴之助」なんかは土着のものをひきずっているでしょう。あんまり好きになれませんでしたね。「ジャングル大帝」にペリシテ人という文字が出てて、その文字だけで目がくらむような、なんて世界には知らない事が多いんだろうって、それをどうやって学べば良いのか見当も



1971年に1966年製にのった

つかないから、一種絶望感みたいなものを感じたことがありますね。

——お話を作ることはやってらしたんでしょう？

宮崎　お話というより、自分をヒーローにして空想にふけるってのは、子供の時はだれでもやるんじゃないですか。恥ずかしくてとっても他人にはしゃべれない物語を、どんな子供でも10歳ぐらいから始めるんじゃないかと思うんだけど……。

自分の子供達とか甥や姪が小さかった頃、ひとまとめにして連れて歩くのが好きだったんですが、夜寝る時にお話をしてやるんです。そうすると、非常に喜ぶ話があるんですね。大人とちがう感じ方をしてくれる。何度も同じ失敗を繰り返す話とかね、単純な話なんだけど大人が想像もつかない位ワクワクして聴いてくれる。ところが、ある時期になると、スッとそういうものに興味がなくなっちゃう。そうやって10歳から12歳くらいの間までに自分の世界を持って、今度は自分が自分でつくった物語—もちろん、本やらTVやらで見たものを土台にするわけですが—の主人公になっていくわけですね。そこら辺から、もう絵本の世界じゃなくなってくる。かくて我が息子どもは大きくなっていく。それはそれで自己形成をしようともがいていく過程として、なんか連帯を感じる時期なんだけど、おもしろがってはいられないんで、おもしろくない、幼児が一匹ほしいなあ、なんて(笑)。

——最近のものはどうですか？

宮崎　あんまり積極的には見てないので、総論としてはいえませんが、鴨川つばめ、柳沢きみお、高橋留美子、少女マンガはほとんど見ないので……。でも、好きだからといっても買って読もうって方ではないんです。萩尾望都は「秋の旅」ひとつで、ぼくにも十分なんで、それ以上見なくても感心してます。高橋留美子は、あの発想の仕方がおもしろい。彼女と同世代の女性アニメーターを知っているんですが、日常の発想がとても良く似ているのがおもしろいですね。ひどくロマンチックなものに憧れる一方で、やたらと現実感覚も鋭くて、それが等価というか、「うる星やつら」で、それまで大騒ぎしていたのに最後のコマで突然全員でカレーを食べてる。生きるの死ぬのの大騒ぎと、カレーが甘口か辛口かが同じ水準で論じられてる。ああいう感覚は僕にはないので愉快ですね。女性が油断なく生きてるってかんじがしておもしろい。

他人をうらやましいと思わない人間なんですが、諸星大二郎はうらやましいと思いましたね。とにかく、貧乏してでもこういう風に出来るというのが、驚きというか……それも才能なんでしょうが……。

だって、あの人の作品は本当にあの人のものですね。あの絵、上手く描こうという意志が全然なくて(笑)、それでも描きたいものをはっきり持ってて、それを的確に表現している。もうけたいとか、メジャーになりたいとか、そんな邪念がないですね。通念としての漫画家とちがう方向の世代が出て来たという衝撃と、自分はこういうのを見たかったんだという快感と両方ありました。

大友克洋を最初に見た時、あ、違う方向から絵を描く人が出て来たと思ったんだけど、衝撃の度合いがちがった。諸星大二郎は好きですね。大好きといっていいな。

——諸星さんでは、どんなものを読まれました？

宮崎　中国を素材にしたものが一番すぐれているみたいですね。でも「失楽園」という作品も良かった。何か根源を問いつづける姿勢が好きですね。

アニメーションでね、よくあるんですが、感動させる為に登場人物を殺すんですよね。ボクシングやるのも光線銃で撃つのも同じ美意識で平気でやっちゃったり。感動させる為に殺して、又生き返らせたり。退廃ですね。

物語をつくる人間は、登場人物に対して神様であるわけですよ。生殺与奪の権利を握っているんです。殺人を平気で描いてかっこよがって、自分は全然痛くもかゆくもなくてすむわけですね。虚構の中の登場人物の生について真剣じゃない態度は、いやですね。もっとも愚劣です。

アニメーションやってましてね、自分で自己規制している部分があるわけです。自分の内面のもっと暗がりの部分を前面に出したら子供のためのアニメーションじゃなくなっちゃう。光の部分で仕事をつづけるから、闇の方がたまっちゃうんですね。諸星大二郎のは全面的に描いてるかんじがして、うらやましいんです。

——その辺はもう、個人の資質であって、しようがないという気もしますけれど。

宮崎　ええ、まあそういう風に言ってみてるだけなのかもしれませんけどね。金を払って買ったことがないという意味では、ぼくは良い読者とは言えないのでしょうが、日本の漫画がこれだけ量的に拡大して、それなりの事はあったんだという救いというか、こういう人がおまんま食っていける——いけてるのかな？

——食っていますよ。

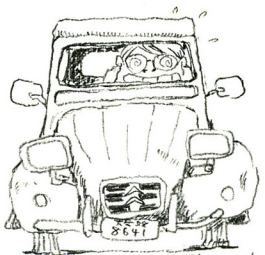
宮崎　いけてるってのが、いいね。

——たとえば、家が欲しいとか、そういうことさえ思わなければ。

宮崎　そういうのはどっちみちダメですから、アニメーターだって(笑)。

——現在、漫画描いててどうです？

宮崎　全然、仕事やってる気がしない(笑)。自分は何をやってるんだろう、という思いの方が本当のこと言って強いんです。アニメーションと漫画は両立しないというのが持論で、両方やろうという若い人がいたら、アニメーションはそんなに甘くないって、ぼくは



1981年に はじめて新車にのったが…やっぱり所もりがしてる

反対する人間なんですよ、本来。いい腕のアニメーターでも、雑誌の連載かかえている人だったら一緒にスタッフは組みませんね。つまり矛盾のかたまりなんです。仕事がヒマな時につい決めちゃって、そしたら本業も来ちゃって、漫画を描いてて本当に職場で肩身がせまいんですね。仕事というより、悪い事をしているという感じの方が正確で……やたらにつらいです。かといって、お金払って見ている人に対して、片手間ですってのは態度として最低ですから、それはしたくないし……。

アニメーションやってる時はやってる時で、これは非常事態で、どうもこれで妻子を養ってるとか生活してるという気分とはちがうんですね。それでも個人で机に向かってゴソゴソやってる方がいくぶん仕事だって感じられるみたいですね。

――でも、そういった意味でいうなら、だれもが同じじゃないですか？

宮崎　アニメーションやってる時は、朝7時に起きてちゃんと会社に出かけていって、夕方5時に帰ってくる、なんて人を見ると、ものすごくうらやましくなる。ああ、本当に生きるべき姿だ(笑)。

村の鍛冶屋というのがいいなあ、と昔からずっと思ってたんですけどね。村に一軒だけあって何でも直す。村に分家があって新しい家ができた時は必要なものを鍛えて作ってあげる。その仕事っていうのは、絶対、村になきゃいけないでしょ。絶対必要とされるものなんですね。そういう仕事っていいでしょ(笑)。

――宮崎さんの描かれたものを見ていると、空とか飛ぶとかいうシチュエーションが多く出てくるように思うんですけれど。塔の上とか。

宮崎　なぜでしょうね。たとえば銀座の服部時計店の建物見ると、あの上に登りたいとか、給水塔見てあの上に登りたいとか。

――いつも、そればっかり考えてる？

宮崎　特にそういうことを一番考えるようになったのは学生の頃ですね。高校3年の時に美術でそれまで描いていたものを全然やめちゃって、とにかく鉄塔とか給水塔とかいうものばかり描いていた時期があったんですよ。なぜでしょうね――まあ、言葉で言ってしまえば何でもないんだけど、お前健康になったなと、教師に言われました。

要するに、バカと煙は高い所がスキなんで……。

――飛行機を操縦したいとかは？

宮崎　ものぐさだから……。ハングライダーで一回飛んでみたい。10メートルぐらいでいいからなんて言いますが、やりそうもないのは自分が一番よく知っていたりして……。

――むしろ心理上の問題のようですね？

宮崎　そうですね。ほら例の「時間は悔恨に発し、空間は屈辱に発する」ってやつだと思いますよ。空への憧れとか目のくらむ高みとか……地面から離れたい、今の自分から違う自分になりたい、そういう類のものなんでしょうね……。だから、映画を作る時、何回やっても高い所へ登らせたいと相変わらず思うんですね……病気です(笑)。

スロービデオの発達のおかげで、テレビなんかで人の動きを良く見られるでしょう。人が走ったり跳んだりする時、空中を実にのびやかに自由に動いているのが判ります。とても残念なことに、僕等の識別能力ではそれを味わうことが出来ないんですが、小さな子が走っているポーズなんか、本当にきれいですね。微妙な首のかしげ方とか髪の毛のゆらめき、光のあたり具合、風が服をはためかす様子とか、実にきれいなんですよ。解放されて、本当に空を飛んでいる……自分のまわりにいくらでもある風景の素晴らしさを、機械を通さないと享受出来ないのは皮肉ですね。

――いま、作りたいものあります？

宮崎　正直言いまして、作りたくて欲求不満でもんもんとしています。傲慢に聞こえるかもしれないけど、やりたいようにやらせてくれたら、見た人に喜んでもらえる自信はあるんだけど、当たるかどうかがまったく保証出来ない企画ばっかりなんで……(笑)。

作りたいものがだんだんはっきりして来て、漫画の原作があるものとか、類似品の多い仕事がイヤなんですね。わがままになってるのかな。

――どういう内容の作品ですか？

宮崎　自分の子供の成長と関係があるんですね。子供がいない時は自分のために作りたかった。幼児がいる時はチビを楽しませるために作りたい。少年になると自分がその頃に夢見た物語が湧き出てきちゃう。今、自己形成期になって、自立と依存の間をゆれている息子を横目で見てると、なんというか、自分の中に闇が存在しているのに気がついた頃の自分を思い出すわけですね。闇を持っていながら、だから光を持って進んでいける少年の自己形成の物語をやってみたいです。昔からぼくらの作品を愛してくれる人が、「パンダ」みたいな作品を作ってくれというんですが、今はだめですね。孫でも出来て、足元でキャーッとかいいながら、チビが走り回るようになったら、又出来るかもしれないけど……。はげしくてエキセントリックなものに、今はどうしても心ひかれてしまう。

――いま描かれている漫画とか……？

宮崎　イヤ、あれはむしろアニメーションでは出来ないものと考えて始めたから……。侍を復活させたいと、ひそかに思ってます。映画やテレビによくある時代劇じゃなくて、あいうの好きじゃないから……。もっと土地とか風土とかと密接にかかわりながら生きて戦う侍を復活させたいんです。歴史とちがってしまってもいい。暗い森と異質なものとの出会いもあって、自分の王国を築いていく者としての侍としての少年というのかな……長

年の夢ですね。

運がよければ出来るだろうし、悪けりゃ出来ない……まあそれ程達観しているわけじゃなくて、まだ物語が出来ないんです。においだけしてて。本当はこうやって話さない方がいいんですね（笑）。あっためておいた方がいい。

アニメーションは風俗営業ですから、作家であるなんてのは幻想にすぎません。入れもの（企画）が決まってから、盛るものをひねり出すわけで、やっぱり自分はアニメーターだと思うから、風俗営業をつづけるつもりでもいます。

少年マガジン特別別冊
宮崎駿　イメージボード集

定　価　一三〇〇円
発　行　昭和五十八年十一月二十日第三刷発行
著　者　宮崎　駿
編集人　三樹　創作
発行人　東浦　彰
発行所　株式会社講談社
〒一一二　東京都文京区音羽二―十二―二十一
電話〇三―九四五―一一一一（大代表）　振替　東京八―三九三〇
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　株式会社国宝社
構　成　綺譚社
装　丁　平野甲賀

ISBN 4-06-108068-7(O)(マ)
©宮崎駿　1983　Printed in Japan
禁・無断転載　乱丁・落丁本は小社雑誌業務部あてにお送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

雑誌 20657-11/20 ISBN4-06-108068-7 C0071 ¥1300E (0)

定価1,300円 ©講談社